

晩夏の両毛紀行－桐生、岩宿、足尾、日光を訪ねて－

高橋 祐吉

旅に出るということ

専修大学社会科学研究所が毎年夏と春に実施している調査旅行は、老後の平々凡々とした退屈な暮らしを続けている私にとって、気分転換のための妙薬となっている。日頃の生活に彩りを添える実に爽やかな清涼剤だと言ってもいい。こんなふうには書き出すと、一体どういうつもりなのかと周りから顰蹙を買いそうな気がしないでもないが、嘘偽りのない本当の気持ちを素直に吐露してみただけである。

私は、定年退職を機に「第二の人生」に踏み出そうと思い、これまでの研究者生活からすっかり足を洗った。大学との繋がりで残すことにしたのは、社会科学研究所の研究参与という肩書のみである。大学を辞めるまでは人文科学研究所の所員でもあったが、退職した際にこちらも退所してしまった。しかしまあ、所員であったとは言っても、ただ名前を連ねているだけの幽霊所員のようなものではあったのだが…。

先日、教員時代の知り合いと町田で飲み食いする機会があった。こうした集まりには、私などは喜んで顔を出すのが常である。気心の知れた知り合いと飲み食いし、雑談を交わすのが楽しいからである。そこでの雑談のなかで、人文科学研究所がこの秋に実施した調査旅行のことや、年明けに企画している次の調査旅行のことが話題に上った。聞いているこちらもわくわくするような話であった。調査旅行に出掛けた人の話を聞いたり、調査旅行を企画する人の話を聞くのも、なかなか面白いものである。

そんな話を聞いているうちに、退職を機に人文科学研究所を退所してしまったのは、早まった決断だったかもしれないと思われ、少しばかり後悔した。いまさら戻してくれとは言えなかったが、その場にいた一人はこの研究所の所長を務めているHさんだったので、退所した人間がまた戻れるものかどうか尋ねてみた。そうしたところ、改めて書類を提出してもらえればまたメンバーに戻れるとのことだった。それを聞いて嬉しかった。

集まりには顔を出してみるものであり、話は聞いてみるものであり、人には尋ねてみるものである。そんなこんなで、私はまた人文科学研究所の所員に戻った。正しくは、退職者なので所員ではなく研究参与である。私が調査旅行に興味や関心を抱くのは、個人ではとても行けそうにはない所に連れて行ってもらえるからであり、しかも、ブログに投稿したくなるような材料が散らばっている旅のように思われるからである。つまり、ただ旅が好きだと言うよりも、

ブログに文章を綴ることができるような旅が好きなのである。

社会科学研究所の調査旅行については言うまでもないが、人文科学研究所の調査旅行にも、これからも機会を見て参加させてもらいたいと思っている。そんなこともあって、旅についてあれこれ考えていたためなのか、私小説作家としてよく知られた上林暁（かんばやし・あかつき）の「旅行上手と旅行下手」というエッセイ集を読む機会があった。亡くなってから40年以上も経つというのに、彼のエッセー集『文と本と旅と』（中公文庫、2022年）が刊行され、そこに収録されていたからである。上林さんは以下のようなことを書いている。

旅行鞆一つ提げて、始終気軽に旅行している人を私は羨ましいと思う。旅行に旅行の次いでいる身分を好いと思う。しかし、私としては、旅行ずれということは感心しない。見聞の広くなるのはいいが、何を見聞しても、大して感興を覚えない。こういうようになっては困るのである。広く恋愛をした人が、かならずしも深く恋愛を味うとは限らない如く、広く旅行をした人が、かならずしも深く旅行を味うとは限らない。私はめったに旅行しない代りに旅行ずれがしていない有難さには、一寸（ちょっと）した旅行でも、いつも生き生きとした感興を覚えることが出来るのを喜んでいる。囑目（しょくもく）、みな珍しいのである。大抵の場合、旅行を一つすれば、小説が一つ書けるのも、その賜物である。

へえー、なるほどねえなどと妙に感心して読んだ。そしてまた、「旅行ずれ」していないと自認している彼は、旅はしっばなしではなく、その思い出を大切にしたいと考えているようなのである。私は上林さんほど思い出を大事にしているわけではないのだが、それでも、もしかしたら旅の思い出を少しでも残したいと考えている人間の一人なのかもしれない。調査旅行に出掛けるたびに、旅日記のような雑文を毎度毎度性懲りもなく書き綴っているからである。こうした行為なども、上林さんが指摘していることと無関係ではないのだろう。彼の文章を引いておこう。

むずかしいことはともかくとして、旅というものは、楽しいものである。楽しいから、よいものである。しかし、旅そのものよりも、旅の思い出の方が、楽しいように思える。私はいつか、「旅もいいが、旅の思い出の方がもっといいんだ」と口走ったことがある。まったく、旅の思い出は楽しい。辛かったこと、苦しかったことすら、美化されて頭に浮ぶ。というのは、心理学に、記憶楽観説というのがあって、悲観的なことすらも、記憶においては楽観的なものになるというのであるが、旅の記憶においては、それがことに楽観的に思い出されるような気がするからである。そこでまた、旅というものは、旅そのものを楽しむというより、そういう思

い出を楽しむためになされるものだといえそうである。

こちらの文章も、そうかもしれないなどと思いながら読んだ。このエッセー集には他にも興味深い箇所があった。彼は自分の文章について、「斬新ではないが、古くさくもない。面白さに感嘆させるところが少い反面、じっくり噛みしめれば味が出ようということを狙っている」(「まともな文章」)と書いている。今でも彼の文章を噛みしめたいと思う人がいるからこそ、こうしたエッセー集が刊行されたのであろう。

上林さんの大ファンである社会科学研究所の元所長の M さんも、大いに喜んでおられるに違いないだろう。この私も、できれば噛みしめれば味が出るような文章を綴ってみたいなどと勝手に夢想だけはしているのだが、そのためには、上林さんの爪の垢でも煎じて飲まなければなるまい。

『人は何を旅してきたか』を読みながら

この9月に社会科学研究所が実施した調査旅行に同行させてもらったので、そのはしがきのようなことを書こうと思っていたのだが、相変わらずの長い前振りで、いつまで経っても本題に至らない。悪い癖である。今回の調査旅行で廻ったのは群馬と栃木だったので、昔の国名である上毛野国(かみつけのくに、群馬)と下毛野国(しもつけのくに、栃木)を用いて、タイトルは「晩夏の両毛紀行」とすることにした。群馬の前橋と栃木の小山を結ぶ両毛線という鉄道があることも、頭にはあった。この調査旅行の顛末については、順次詳しく紹介していくつもりであるが、もうしばらく前振りにお付き合いをお願いしたい。

人文科学研究所のメンバーに戻してもらった話から、調査旅行という名の旅に関する話題に話を広げようとしたところ、『人は何を旅してきたか』(専修大学出版局、2009年)という大変興味深いタイトルの本があったことを思い出した。人文科学研究所が創立40周年を記念して行った旅に関する公開講座での10話のうちの5話を纏めたものである。せっかく研究所に戻してもらったことでもあるので、この機会に真面目に読んでみようと思った。相変わらずの殊勝な心掛けではある。

ここに収録された5本の論文のうちの3本は、海外に向かった旅の話だったので、私のような興味や関心の範囲がきわめて狭い人間には到底読めないだろうと思い、残りの2本を読んでみることにした。亡くなられた文学部の青木さんが書かれた「産業観光への誘い」と、同じ経済学部で同僚だった永江さんが書かれた「近代日本の旅と旅行産業」である。ともにあれこれと学ぶことが多かった。もともと、こちらはこうした分野に関してはもともと何も知らないに

等しい人間なので、どれを読んでもしっかりと学ぶことになるのではあるが…。

この二つの論文は、「産業観光」あるいは「観光産業」と、ともにタイトルに「産業」と「観光」が付いている。近年の私は、それだけでいささか読書意欲を削がれがちになる（料理屋・芸者屋・待合茶屋の三種の営業を指す「三業」であればそうでもないのだが…）。何故なのだろう。すっかり年寄りになって、現代よりも過去への郷愁に心が動かされがちになっているからなのであろうか。あるいはまた、私が離れてしまった経済学の匂いのようなものをそこに感ずるからなのであろうか。はたまた、私が好んでいる旅の姿には似つかわしくない言葉のように思うからなのであろうか。

そんなわけだから、それほどの関心や意欲も持たずに読み始めたのだが、中身は予想したものとはすっかり違っており、いい意味で裏切られた気分になった。とりわけ青木さんの論文などは、タイトルを考え直した方がいいのではないかとさえ思ったほどである。読書の愉しみはこうした思いも掛けぬ発見にもあるのだろう。青木論文によれば、寺社への参詣から始まった観光が、各地の物見遊山へと広がり、さらには、旅する人間の関心も見物から名物へと向かっていったようなのだが、そうした旅の世俗化の流れが、豊富な文献の渉猟によって跡付けられていた。

それに対して、永江論文の方は、JTB を軸にして日本の観光産業の発展が丁寧に整理されており、こちらも勉強になった。明治初期に始まった政府の観光に関する政策は、外貨獲得のための外国人観光客の誘致を目指していたようなのだが、それが国内の人々の観光旅行への関心を広げ、戦後になるとその関心は国内旅行から海外旅行へと発展していくことになる。Go To トラベルや外国人観光客の誘致が世間の大きな話題となったことから分かるように、観光産業は現在の日本経済にとってきわめて大きな比重を占めているのである。そんなことがよく分かる論文だった。

今回の調査旅行では、最終日に中禅寺湖の湖畔に建てられた英国大使館別荘や金谷ホテル歴史館を訪ねた。そこで感じた明治の面影に関しては、永江論文にも関係するところなので、後に詳しく触れてみたい。名前だけしか知らなかったアーネスト・サトウやイザベラ・バードやの事跡をも知るようになったので、繋がりというものはいろいろなところにあることを改めて感じた。

そう言えば、青木論文には江戸末期に活躍した加賀の豪商銭屋五兵衛の旅の話が紹介されているが、そこには信州の村々が養蚕と製糸業で変貌したことが記されていた。そしてまた、その変貌に関連して、一茶の句である「村中にきげんとらるゝ蚕哉」も添えられていた。以前に書いた旅日記で、養蚕が盛んな地方では蚕のことを「お蚕（こ）さま」と呼んで大事にしていたことを紹介したことがあるので、何だか妙に懐かしく思われた。

熊谷駅に降り立って

話が半分脇道にそれたので、タイトル通りに社会科学研究所の実態調査に戻すことにしよう。今回の実態調査では、「近代化遺産を通して学ぶ社会変化」のPart2ということで、前回に引き続き北関東を廻ってきた。この実態調査に参加させてもらった私は、初日の9月6日に集合場所である熊谷に向かった。前回の春に行われた実態調査でも高崎線に乗っているのだから、当然熊谷駅を通っているわけだが、その時はただ通過しただけだったので、まったく記憶に残っていなかった。夏の暑さで知られるこの町に降り立ったのは、今回が初めてである。

自宅からどのようなルートで行けばいいのか知りたければ、今ではスマホが簡単に教えてくれる。どうせ時間に余裕のある身だし、かかる時間にそれほど大きな違いはないので、最安値のルートで熊谷に向かった。駅の側の食堂で昼食を食べ、その後駅前をぶらぶらしていたら、ラグビーに関する記念碑がいくつか目に付いた。野球にもサッカーにもラグビーにもまったく関心を払っていない私のような人間には、何故そんなものが熊谷にあるのかまったく分からなかった。上の小僧はラグビーが大好きで熱中しているようなので、スマホで写真を撮って送ってやったところ、熊谷には立派なラグビー場があって、ラグビーの東の聖地だということだった。

知らない場所に出掛けると、時間があれば本屋に顔を出すのが常である。必ず覗くのは地元関連の出版物のコーナーである。ブログに文章を綴る際の資料を漁ろうとのさもしい魂胆である。駅の構内にあった大きな書店で見つけたのは、『世界遺産 富岡製糸場』（勁草書房、2016年）という著作である。

春に富岡製糸場を訪れた際にも、あれこれの関連する著作を買い求めたのだが、その時にはまったく気付かなかった。著者は遊子谷玲（ゆすたに・れい）という方で、著者紹介欄には「絹産業、世界遺産などについてフィールドワークで調査・研究を行う在野の研究者」とあった。名字もたいへん珍しいのだが、その内容もまたきわめてユニークである。著者は、この著作の狙いを次のように述べている。紹介しておく。

この書は、富岡製糸場の世界遺産登録に触発され、この施設についてこれまであまり語られてこなかった視座から、絹産業の世界遺産登録の意義をあらためて問い直してみたいという目的で書かれたものである。とはいっても、すでに様々な研究のあるブリュナや和田英のことを詳しく語ろうという内容ではない。正史のど真ん中ではなく周縁部分、あるいは少し脱線しながらも意外なつながりを発見できるような視点から、富岡製糸場や生糸を挽くという産業について語ってみようという試みである。

富岡製糸場に関してにわか勉強を始めた私は、「正史」のような文章ばかりを読んできたためなのか、正直なところいささか飽きがきていたが、この著作はまったく違った。「周縁」がたいへん丁寧に調べ上げられているので、読んでいて飽きることがない。富岡製糸場を語る際の必読文献であると言って間違いなからう。何故この著作をこれまで知らずにいたのだろうか。考えると何とも不思議な気がする。こちらの文献渉猟が雑だった所為ではあろうが、もしかしたら、タイトルがあまりにも「正史」風なので、この手の本はもういいだろうと思って敬遠した可能性もあったかもしれない。そんなわけだから、この後の叙述に際して大いに参考にさせてもらうつもりである。

それにしても、熊谷でこの著作に巡り合うことができたのは幸運だった。こういうこともあるから、本屋巡りは欠かせないのである。今回の実態調査は3泊4日だったが、そのうちの初日と翌日は前橋のホテルに連泊した。そんなわけで、前橋でも駅前にあった大きな書店に顔を出してみた。しかしながら、そこには地元の出版物のコーナーすらなかった。県都前橋であり、「詩（うた）のまち」前橋だというのに、いったいどうしたことだろう。念のために駅の構内にまで足を伸ばしてみるべきだったかもしれない。

田島弥平の旧宅にて

今回の調査旅行に参加する方々と待ち合わせたのは、熊谷駅の側である。参加者の中には、前回の実態調査に間際で参加できなくなったAさんに加えて、知り合いの若いBさんまでもが顔を出していたので、何やら楽しい旅になりそうな「悪い」予感がした。お調子者の私などは、いい気になって羽目を外しかねないからである。我々一行が、まず出向いたのは田島弥平（たじま・やへい）旧宅である。田島弥平と聞いてすぐにピンとくる人は、世界遺産となった富岡製糸場関連の事情にかなり詳しい人に違いなからう。

遺産に登録されたのは、「富岡製糸場と絹産業遺産群」であって、製糸場をメインにしているとはいうものの、それだけではない。製糸場の他に田島弥平旧宅と高山社跡、それに荒船風穴を加えたものが世界遺産を構成しているのである。前回の春の実態調査では、富岡製糸場を訪れて学芸員の方の話を詳しく聞きながら施設を見学したものの、それ以外の所には行くことができなかった。そこで今回の訪問となったのであろう。

旧宅は伊勢崎市の境島村にある。利根川の土手の側が駐車場となっており、その脇に案内所があった。そこでガイドの方の話を一通り聞いてから、田島弥平の旧宅に向かった。この日の気温は34度にもなったので、噂に聞いていた熊谷の暑さを直に体感するような思いだった。しばらく歩いて目的地に辿り着いたが、大きな農家があるだけなので、話を聞いていなければ遺

産の遺産たる所以はおそらく分からないだろう。案内所で入手したパンフレットをもとに、この場所を紹介してみる。

田島弥平の旧宅がある島村は、江戸時代から蚕の卵（蚕種）製造の盛んな地域でした。田島弥平は良い蚕種のための養蚕法を研究、通風を重視した「清涼育」を大成し、1863（文久3）年に越屋根（こしやね）のある住居兼蚕室を完成しました。弥平が著した『養蚕新論』、『続養蚕新論』によりこの構造は各地に広まり、日本の近代養蚕農家建築の原型となりました。また、弥平らは1879（明治12）年から1882（明治15）年までイタリアに蚕種を運び、現地で直接販売（直輸出）を行いました。この際に西欧の文化と共に持ち帰った顕微鏡で、弥平は蚕の病気の研究を行いました。富岡製糸場が繭の改良運動を始めると、田島家は外国種や一代雑種の試験飼育に協力しました。

絹の話になると、繭や生糸のことだけ思い浮かべがちだが、いい繭を手に入れるためにはいい蚕が必要となる。蚕の卵である蚕種（さんしゅ）にも改良の努力が続けられていたのである。われわれは弥平の旧宅で日本の近代養蚕農家の原型を目にしたわけだが、ここには彼の血縁の方が現在も住んでおられるので、中までは入ることができなかった。しかし、外から見学しただけでもよく見るとその特徴は目に付く。換気設備である越屋根が付いた総二階建ての建物となっているからである。

越屋根とは、切妻屋根の中央の一部を上を持ち上げたような屋根のことを言う。立ち上がり部分を利用することによって、換気や採光に役立てることができるのである。弥平の旧宅は、一階が母屋で二階が蚕室となっており、通風をよくするために窓が多い越屋根が、棟全体にわたって造られていた。母屋の二階で蚕が飼われていたのだから、それだけ大事にされていたということなのだろう。

「上毛新聞」の8月2日号には弥平の生誕200年の記事が掲載されており、そこには「養蚕偉人」とあった。地元ではそれだけ高い評価を受けているということなのか。先にも紹介したように、イタリアに蚕種を運んで現地で直接販売したというし、彼の地で顕微鏡を入手して蚕の病気の研究もしたようだから、すこぶる進取の気性に富んだ、そしてまたたいへん研究熱心な人物であったように思われる。

外観を見ながらガイドの方の話を聞いているのに飽きてしまった私は、近くを流れる利根川を眺めてみたくなり、途中で一人先に駐車場に戻って土手に上ってみた。河原があまりにも広いので、川筋は遠方に少し見えただけだった。いかにも大河であり、坂東太郎や大利根と呼ばれるだけのことはある。前回の実態調査の帰りに深谷に寄った私は、父と同じように利根川の土

手に上って見たかったが、深谷駅からは交通の便も悪く断念した。そんな経緯があったものだから、土手から利根川を一望できて満足した。勝手に動いていたら、いつの間にか行方不明となった私を探すために、件の A さんから電話がかかってきた。年寄りが訳もなく徘徊しているように思われたのかもしれない。

尾高惇忠の生家にて

次に向かったのは、田島弥平旧宅からさほど離れていない尾高惇忠（おだか・じゅんちゆう）の生家である。この場所は深谷市の郊外にある。惇忠は富岡製糸場の初代場長となったことで知られる人物であるが、彼についても一体どれだけの人が知っているのだろうか。生家で手にしたパンフレットによると、1830（天保元）年に生まれた惇忠は、渋沢栄一の従兄にあたり、栄一は少年時代からこの惇忠のもとに通って論語をはじめ多くの学問を彼に学んだのだという。後世、“藍香（尾高惇忠の号で「らんこう」と読む）ありてこそ栄一あり”と称えられたらしい。吉田松陰の言葉として知られる知行合一（ちこうごういつ、真の知識は実践をとまなうの意）の水戸学に精通し、栄一の人生に大きな影響を与えた人物のようだ。

明治に入ると、それまで尊皇攘夷の信奉者であった惇忠は、栄一の推薦もあって富岡製糸場の初代場長となり、日本の近代化の歴史にその名を刻むことになる。惇忠もそうだが、彼の娘で製糸場の伝習工女第一号となった勇（ゆう）もここで育っている。生家には彼女の写真も飾ってあった。

製糸場の開業にあたって、彼はその準備段階から重要な役割を果たしている。ブリュナとともに製糸場の建設に適した場所を探して富岡に定めるとともに、用地の買収などの実務を取り仕切ったほか、ブリュナが製糸器械の調達や指導役の技術者の選定などのために、一時フランスに帰国した際にも、留守を預かりその間に始まった製糸場建設の責任者として、大いに腕を振った。

よく知られているように、惇忠が直面した困難の一つが、工女を思うように集められなかったことである。国から布告を出し、県令から各地区の戸長にまで徹底したにもかかわらず、当初想定していた 400 人あまりの工女は、操業予定日までに半分も集めることができなかったという。ブリュナをはじめとしたフランス人が飲むワインが「人間の生き血」だと誤解され、富岡に若い女性を送ると生き血を吸われるという風評が流布したからだとはよく面白半分と言われる話だが、勿論それだけではない。

奉公ならともかく、うら若い女性を外国人が監督する工場の寄宿舎に入れるということに対する抵抗感の方がずっと大きかったのではあるまいか。10 年前まではこの地方でも攘夷の嵐が

吹き荒れており、惇忠などはその先頭に立っていたのである。応募者の少なさに手を焼いた惇忠は、当時まだ14歳であった自分の娘の勇を率先して工女として富岡に連れて行くのである。このエピソードは、惇忠の苦悩の大きさとともに、彼の責任感の強さをよく表しているように思われる。

二人をめぐる物語は、植松三十里（うねまつ・みどり）の『繭と絆』（文藝春秋、2015年）において小説仕立てで詳しく紹介されている。惇忠は、ブリュナらのフランス人指導者を帰国させたあとも場長の座にとどまり、製糸場の経営の立て直しに尽力したが、1876年に職を辞さざるをえなくなった。

赤字を解消するために、これまで年一回しか採れなかった繭を秋にも採れるように、その道筋をつけるべく努力したようなのだが、これが生糸の品質を落とすたくない政府の方針に反するとして、条令違反で事実上解任されるのである。こうした事態を先導したのは、三代目の場長となった速水堅曹（はやみ・けんそう）であったようだ。惇忠は辞めてからは地元を離れ、製糸業に関わることはなかった。心中にはどのような思いが去来していたのであろうか。

尾高惇忠と速水堅曹

先にも触れたように、富岡製糸場の初代場長であった尾高惇忠は4年で更迭されることになる。辞めた翌年に、彼は渋沢栄一の推薦で国立第一銀行盛岡支店の支店長に就任するのであるが、もしかしたらそこでの惇忠は余生を過ごしていたようなものだったかもしれない。これは私の勝手な推測である。先に紹介した『繭と絆』によると、渋沢栄一と三代目の場長となる速水堅曹とは「犬猿の仲」だったようで、栄一の推薦で初代場長となった惇忠は、栄一と縁戚関係（惇忠の妹が栄一の妻となっている）にあったから、同類の存在と見做されていたのであろう。

内務省に入った堅曹は、製糸技術に関するスペシャリストとしての強い自負心もあったようで、富岡製糸場の経営診断に自ら乗り出すことになる。その結果、秋繭の取り扱いや民間払い下げをめぐる惇忠と対立するのである。先の小説では、惇忠と堅曹と栄一の三者に勇も加わって、話は次のように描かれている。

小説として描かれているので、当然ながら脚色されているわけではあるが、それにしても、富岡製糸場を舞台にした3人の男たちの確執が、あたかもドラマを見ているようでなかなか興味深いものがある。ブリュナの話も和田英の話も悪くはないが、面白そうだし重要なのは、どうもこちらのように思われる。

速水は縁側から立ち上がり、勇の間近まで来て言った。

「私は何も尾高場長が憎くて、こんなことを言っているのではない。ただ秋繭のような粗悪品を、政府の許可も得ずに使うという不正が、許せないのだ」

勇は食ってかかった。

「不正などではありません。粗悪品でもありません。だいいち、どんな繭を使うかは、ムッシュ・ブリュナと場長に任せられていたはずです」

「いや、繭は選別して、良好なものを使うという決まりがある。普通の繭に、秋繭の大きさのものが混じていたら、誰でも撥ねるだろう。それを家族ぐるみで隠して使っていたのだから、どう考えても不正だッ」

「違うんです。父は隠したりしていませんッ」

「それにな」

速水は少々もったいをつけてから言った。

「そもそも秋繭を持ち込んだのは、尾高場長の従兄弟だそうだな。家族ぐるみどころか、親戚ぐるみで儲けようという魂胆だろう」

「違います。成一郎叔父さんは、フランスまで留学した人で、新しい知識で秋繭を」

速水は最後まで聞かずに言う。

「その留学も、洪沢栄一の手配だったそうではないか。この製糸場も、もとはといえば洪沢栄一の発案だと聞いている。場長の人選からして、奴が身内を利したわけだ」

速水は以前から栄一とは犬猿の仲だ。どちらも自信家だけに、いったん意見がぶつかると引き下がらない。

勇は懸命に食い下がった。

「それも違うんです。栄一叔父さんは、誠実な人物を場長に据えたいと考えて、いちばん信頼できる人を選んだだけです」

「それほど誠実な者が、秋繭を使って儲けたりするのか」

「それは製糸場を黒字にするためです。だいいち成一郎叔父さんが秋繭を持ち込んだのだって、自分が儲けるためじゃなくて、養蚕農家のために」

私利私欲は、惇忠のもっとも嫌うところだ。

上記のような事情を背景にして、惇忠は場長の職を辞することになるわけだが、その後の処遇については、次のような話も書き込まれている。惇忠の胸の内が偲ばれるような話ではあるまいか。

「今さら晴耕雨読で暮らすってわけにも、いかんだろう。次郎だって東京の学校に進みたいだろうし。それに娘が五人もいるんじゃ、嫁入り支度もかかるぞ」

だから銀行に入れと勤める。勇は少し心配になって聞いた。

「でも身内ばかり最真にして、ほかから、やっかまれませんか」

以前、秋蘭の件で、親戚ぐるみで儲けようとしたと、速水から勤ぐられたのが気になっていた。だが栄一は豪快に笑い飛ばした。

「身内を使って、何が悪い？ 銀行は何より信用が大事だし、身内ほど信頼できる者はいない。だから勇の亭主でも誰でも、信頼できる者には働いてもらう。それだけだ」

ただ惇忠はかたくななところがあり、栄一の誘いには即答しなかった。

われわれは、実態調査の3日目に「日本絹のさと」という施設を見学した。養蚕や製糸、絹織物をテーマにした県立の産業博物館である。この施設の外観は養蚕農家をイメージして作られているようで、養蚕農家の四季を描いたビデオなどもここで見ることができた。働く人々が登場していたので興味深く眺めてきた。周りには桑畑もあった。この施設の売店に『文学の中のシルク』と題された薄手の冊子が置いてあったので、興味を持った私はせっかくの機会なので購入しておいた。

そこに、大衆文学の世界で著名な土師清二（はじ・せいじ）という作家が書いた『生糸』が取り上げられていた。1944年の作品である。冊子に載った紹介文を読んでいたら、気になるところがあったので、せっかくだから現物を読んでみようと思ってネットで探して購入した。戦前の本だからかなり破損した文字通りの古本だった。それによると、惇忠の辞職の事情は要次のように描かれている。

惇忠らは、水口村の風穴を開き、農民に秋蚕の指導を始めるのだが、有力な養蚕農家の中には秋蚕飼育に反対する者がおり、秋蚕の掃立（はきたてと読み、孵化した蚕を蚕座に移して飼育を開始する作業のこと）を行うものは、蚕種条例に違反しているとして熊谷裁判所前橋支庁に告発するのである。条例違反の有罪判決が出た直後、監督官庁から、「官に在るものが、このような発明事業に身を入れるのはけしからんことであり、叱り置く」と戒告してきたという。こうした処分に対して、「ばかばかしくて話にならん」と惇忠は富岡製糸場を去ったというのである。

渋沢栄一の巨像を仰ぎ見て

初日にわれわれが訪ねたところは、田島弥平の旧宅と尾高惇忠の生家の他にもう一つあった。

渋沢栄一記念館である。日本の近代化を論ずるうえで欠かすことのできない(と言われている)この人物について、私が改めて紹介すべきことなど何もない。「近代日本経済の父」であり、「民間経済の巨人」であり、はたまた「日本を創った男」とまで評されたりもしている。大河ドラマのタイトルのように青天を衝き過ぎて、いささか脳天気な評価になっているような気もしないではないのだが…。これほど偉大な彼が、深谷の三偉人(栄一、惇忠そして蕪塚直次郎)は勿論のこと埼玉の三偉人(栄一、塙保己一、荻野吟子)に選ばれているのは、当然のことであろう。

地元の偉人の業績を称えるだけの記念館に、私はそれほど興味を覚えなかったので、ガイドの方の説明を聞きながらぼんやりと見て廻ったに過ぎない。彼の唱えた道徳経済合一の思想とは、今風に言えば信頼という土台なしに市場経済は成立しないということなのかとか、彼がもっとも信頼していたのは身内であったようだが、これも今風に言い直せばネポティズム(縁故主義)ということなのかとか、そんなことが頭に浮かんだ程度である。考えてみれば、明治政府などは薩長閥を核にしたネポティズムの権化のようなものだったから、身内を大事にした栄一の行動などは、当時のごくごく普通のことだったのであろう。

それよりも、私が驚いたのは、記念館の裏側に建っていた彼の巨大な銅像である。高さは5メートルはあり、仰ぎ見るような大きさである。この銅像は「男爵渋沢青淵先生寿像」として1913(大正2)年に制作されたものもとになっており、現在のような大きさとなって深谷駅前前に建立されたのは、1988年のことだという。その後1995年の記念館の開設を機に、ここに移設されたということだった。

私などは、あんなに高いところから栄一が天下国家を睥睨しているのかと思うと、いささか(いや、かなりか)鼻白む思いがした。地元の人々が偉人を顕彰することにとにかく言う気はないが、その度が過ぎると最員の引き倒しとなりかねない。『論語』を学び、社会福祉事業や教育や医療の分野にも関心を払った彼の事績を眺めるならば、その視線がもう少し低いところにあっただことぐらい分かりそうなものではないか。

昔高松市内の中央公園で、立派な台座に立つ菊池寛の巨大な銅像を目にしたことがあったが、銅像などというものは大きくなればなるほど空疎で馬鹿げたものになる。菅義偉や森喜朗の銅像も建てられるとのことだが、何とも愚かな所業だと言う他はない。今更言うまでもないが、そんなものはあっという間に忘れ去られるはずである。私のような人間は、新しい1万円札を手にするたびに、栄一のこの巨大な銅像を思い出して一人苦笑することになるのだろう。

ところで、私はこれまで足尾銅山の経営で知られる古河市兵衛と渋沢栄一との関係については、深くは知らなかったが、市兵衛のことを調べているうちにおおよそのところは分かってきた。ここにわざわざ書き記すようなことでもないのですがその話は省略するが、高山憲行著の『日

本の歴史と足尾銅山の光芒』(郁朋社、2015年)を読んでいたら、次のような栄一評が目にとまった。私がぼんやりと感じていた違和感が、はっきりした姿形をとったように思われたので、紹介しておくことにする。市兵衛といい栄一といい、その人間としての佇まいは、後に詳しく触れる田中正造とは対極にある人物だったのであろう。なかなか辛辣な人物評だが、当たらずとも遠からずといったところか。

渋沢は、臨機応変に物事を考えるところがある。渋沢というと、日本経済の理念を打ち立てた賢明にして堅実な人格者というイメージが強いが、初めから王道を歩いた人物ではない。出身の埼玉県深谷にいた頃、血気にはやり、尊王攘夷を唱えて開国論者を敵視していた時代があったかと思えば、江戸に出て一ツ橋慶喜後の十五代将軍慶喜に仕え、幕末維新をなんと留学先のフランスで過ごしている。

フランスと言えば、幕末の日本にアメリカ同様、通商を持ちかけ、旧幕府軍と倒幕派の間を渡り歩き、あわよくば日本を植民地化しようと企んだ国である。その後渋沢は、首尾よく動乱の時代の惨禍を逃れ、新政府に呼ばれ大蔵省に出仕するという、幕末の志士と呼ばれた人々から見れば、目敏い出世魚の典型のような立ち回りをしている。晩年の賢人的所為の数々は、様々な経験と自身の人間的成長が結実したものであり、青雲の志を一筋に貫いて生きた聖人君子ではない。

「ノコギリ屋根」考

2日目は前橋から桐生に向かい、市内の伝統的建造物保存地区などを各自で自由に散策し、昼食もそれぞれでとることになった。当初は別の施設を見学する予定であったようだが、コロナの関係でそれが難しくなったために、変更されたのである。不真面目な私などは、中身の濃い実態調査の間に挟まれた貴重な自由時間のように思われて、少しばかり嬉しかった。年を取ってきたこともあって、目一杯見学が続くといささか疲れを感じなくなったからである。それとともに、街中をぶらぶらしながらあっちこっちを見て廻るのが、もともと好きな所為もあったかもしれない。

私は件のAさんやBさんと連れ立って、保存地区に出て桐生天満宮に向かうことにした。この場所は前回の調査でも見学しているので、私自身はそこに出向く気にはならなかったが、連れの二人は前回の調査に参加していないので、まっすぐに天満宮に向かったようだ。私としては、街中を気儘にぶらついて、できたらいい写真を撮って見たかった。勿論前回も写真を撮ったのだが、それほどゆとりなく動いていたこともあってか、どうもいい写真が撮れなかった。

今ゆとりがなかった所為のように書いたが、本当のところはこちらの腕前が今ひとつだったからであろう。

とりわけ有鄰館は格好の撮影ポイントだったが、そこでの写真が、光があまり差し込まない場所だったこともあってピンボケになってしまったので、今回は是非とも納得できる写真を撮りたかった。当日は曇り空の昼前ということもあって、天満宮に向かう本町通りは人もクルマも少なかった。絹織物業の最盛期には群馬一の人口を誇った桐生市だが、今その面影はない。依然として人口減少が続いているようである。そんなわけだから、通りを好き勝手に横断して、あっちこっちで写真を撮った。

写真集があればそれで済むようなものだが、それが無い。前日も土産物屋で尋ねたのだが無いとのことだった。ネットで検索してもそれらしきものが見つけられなかったから、今回も無理だろうと思っていたところ、町歩きの終わり近くに立ち寄った土産物屋で、『ノコギリ屋根の風景』（桐生タイムス社、2022年）と題した写真入りのエッセー集（あるいはエッセー入りの写真集か）を見つけた。今年の5月に出版されたばかりの本であった。著者は写真、文ともに箕崎昭子（みのさき・あきこ）という方である。あとがきによると、2014年から20年にかけて「桐生タイムス」紙上に連載されたものが、この本の元になっているとのことである。

彼女は、桐生に残るノコギリ屋根を一軒一軒訪ね歩き、写真を撮るとともにその来歴を丹念にインタビューして纏めており、この本には150棟ほどのノコギリ屋根が紹介されている。最盛時には500棟はあったという。地元の研究者が確認したところによれば、今でも370棟は残されているとのこと。絹織物業が衰退してからかなりの時間が経つというのに、結構な数のノコギリ屋根が残っているのだから、正直驚いた。はしがきには、ノコギリ屋根の由来について、そしてまた多くのノコギリ屋根が残った理由について、次のように書かれている。

屋根の形状がノコギリの歯のような三角屋根の建造物で、歯が連続しているものだけでなく、一つだけでもOKである。三角の短辺が急傾斜あるいは垂直になっている面に大きな採光窓が開けられ、多くが北向きで、一日中安定した間接光を得ることができる。織物、染色、紡績などの工場では布の色柄や繊維の組織をみるに適していた。電力供給が不安定な時代にも、明るさを確保できたのだ。

騒音を吸収し、天井高があって柱が少ない構造のため、各種の機械を入れることができた。増改築も転用も容易であり、業績の好調によって連を建て増したり、逆に繊維産業から撤退して鉄工場になったりアパートになったり、近年は飲食店や美容室、ブティック、ワインセラー、ギャラリー、イベントホール、資料館、工房、共同アトリエなど、さまざまに活用されている。融通無得な、元祖エコ建築といえる。

市のホームページにも、ノコギリ屋根の工場に関して次のような記述がある。「桐生市内には多数のノコギリ屋根工場が存在し、貴重な産業遺産として評価されるとともに、観光資源としても期待されています。役目を終えたノコギリ屋根工場が解体され、年々減少しており、保存が大きな課題となっているなか、最近では新たな役割で再活用されている工場が人々の関心を集めるようになり、桐生市工房推進協議会にもノコギリ屋根工場の利用希望者等からお問い合わせをいただいています」。

そんなわけで、この協議会では、「ノコギリ屋根工場に興味・関心をお持ちの方にお応えするとともに、一層の活用促進が図られるよう、市内のノコギリ屋根工場についての情報発信に取り組んで」いるというのである。吉田敬子という方の『のこぎり屋根紀行』（上毛新聞社、2016年）によれば、ノコギリ屋根の工場は今でも全国至る所に残っている。別に絹織物の工場だけに限らないからである。繊維産業が盛んだった東京都の八王子や青梅、愛知県の蒲郡、大阪の岸和田などにもかなりの数が残っているのだが、それでもその数は桐生が群を抜いて多い。限定された地域に数多く残されているが故に、新たな役割が付与されて再活用が進められつつあるのではなかろうか。

坂口安吾碑のこと

絹織物業の繁栄によって蓄えられた富は、さまざまな歴史的な文化財に名残をとどめており、そのいくつかは前回の実態調査で見学した。個々の文化財の保護も勿論大事なことではあるが、それだけでは町おこしは難しかろう。現在桐生市は、中心市街地の活性化を図るため、桐生新町重要伝統的建造物群保存地区とその周辺地区を重点区域とする「桐生市歴史的風致維持向上計画」を策定し、旧市街地を中心とした歴史的建造物と祇園祭などの伝統行事を生かしたまちづくりを進めているのだという。市のキャッチフレーズは、「伝統と創造、粋なまち桐生」だとのこと。キャッチフレーズもなかなかおしゃれで小粋である。

町おこしの具体的な様相やその意義については、関村オリエ「縮小する国内蚕糸業と絹へ回帰する産業遺産―群馬県桐生市の事例―」（『専修大学社会科学研究所月報』No.710・711）などを参照してもらいたい。私のような素人がしゃしゃり出る必要はない。話はまた『ノコギリ屋根の風景』に戻るが、養崎さんは次のようにも書いている。桐生に対する愛情溢れるいい文章なので、是非とも紹介しておきたい。

はしがきは、「天を指す鋭角、ギザギザと空を刻む。ガシャコンガシャコンとリズムカルな機音を響かせて、ノコギリ屋根って、カッコいい。桐生のまちを歩き来しながら、路地奥にその姿を見つけるたび、心がスキップした」で始まり、「ノコギリ屋根といえば桐生 桐生といえば

ノコギリ屋根。繊維産地、織都の顔であり続けてほしいし、個性を生かした多彩な業種を内包して、新たな刺激を発する場になってもらいたい。ますますカッコいい存在として、天空を刻み続けてほしい」で終わっている。

有隣館で件の二人から離れて写真を撮っていたら、中庭で丸いテーブルを囲んで地元の方が何やら話し合っておられた。町おこしに携わるボランティアの人々でもあったのだろうか。通りには「伝建まちなか交流館」という建物もあった。お調子者の私などは、「何を話されているんですか」などと声を掛けたくなったのだが、真剣に議論されているようだったので、つい声を掛けそびれた。大通りに戻ってふらふらしていたら、天満宮から戻ってきた二人と顔を合わせた。この狭さが何とも心地よい。

町をぶらついていた際に、「坂口安吾千日往還之碑」が目にとまった。この碑は、桐生新町保存会の名で建てられており、碑には『墮落論』『白痴』で戦後文学の旗手となった坂口安吾は、1952年2月ウルウ日、旧友南川潤の世話でここ書上邸に居を構えた。『夜長姫と耳男』を生み、人の子の親となり、『新日本風土記』を執筆の最中、取材旅行から戻った直後に急逝、55年2月17日早朝、48歳4ヵ月だった。通夜には小林秀雄、尾崎士郎、石川淳、檀一雄らも駆けつけた」と刻まれている。

たまたまだが、安吾が南川潤を頼って桐生に転居し（その後、アドルム中毒となった安吾が南川の妻に暴行を加えたために、二人は絶交している）そこで死んだことは知っていたが、生まれ故郷の新潟ならいざ知らず、桐生にまで碑があったとは知らなかった。太宰と並んであまりにも著名なこの人物の破天荒な人生について、私がここでわざわざ触れる必要もないので、彼が3年ほど住み死を迎えた桐生の地をどう見ていたのかということだけ紹介しておく。彼の作品「桐生通信」の冒頭部分である。墓もいらないうちで安吾のことだから、この碑のことを知ったらきっと嗤うことだろう。

私の住居は田舎の小都市ながらメインストリートに位している。この生活は少々の騒音を我慢すれば、かゆいところに手が届いて便利である。たとえば消防車のサイレンが行きすぎると、広告塔が間髪をいれず、「ただいまの火事はどこそこでございます」と叫んでくれる。この広告塔ははなはだ、し（斯）道に熱心で、深夜でも報告を怠らない。四隣みな商店だから急場の必需品にも手間ヒマがかからず、居ながらにして街の呼吸が伝わってくる。

けれども私が本当に呼吸しているのは東京の空気である。私はこの小都市に住んで、年に二度ぐらいしか上京しないが、日々の読み物、そして心の赴く物は人の世の中心的なもの、本質的なものからそれることはできない。私の目や呼吸が東京の空から離れることはありえないのである。私は毎日この町のメインストリートを散歩する。その目に映じるものは風景にすぎな

い。心の住む場所はまた別で、それはどこに住んでも変りがないものだ。

大通りで顔を合わせたわれわれ三人は、お目当ての老舗の鰻屋「泉新」で昼食をとり、満足して外に出たら今度は同行のCさんと出会った。彼もこの店で鰻を食べたとのこと。集合時間にはまだ間があったのでお茶でも飲もうということになり、揃って近くにあった「近江屋喜兵衛」という店でコーヒーを飲んだ。

旧い家の座敷をレストランに改装したようで、なかなか趣のある場所だった。とりたててどうということもないような四方山話が続いたが、調査旅行に出掛けた先で得られたそんな時間がいかに贅沢に感じられた。「伝統と創造、粋なまち桐生」がもたらしてくれた、東の間の贅沢ではなかったろうか。

岩宿博物館にて

この日の午後に向かったのは、みどり市の笠懸町にある岩宿博物館である。両毛線の岩宿駅の側にある。私などは、岩宿遺跡についても最初の発見者である相澤忠洋（あいざわ・ただひろ）についても、かなりぼんやりした知識として頭の片隅にあっただけである。あらためて手元にあった受験参考書である山川出版社の『詳説日本史研究』を広げてみたら、次のようなことが書かれていた。相澤に関する記述などはだいぶ異例のようにも見えるが、その理由については後で触れる。

更新世の日本列島に人が住んでいたことが発見されたのは、第二次世界大戦後のことであった。関東地方の地表面の黒土（くろつち）の下には、更新世末期に堆積した赤土（あかつち、火山灰）の厚い層が重なっており、関東ローム層と呼ばれる。この関東ローム層に遺跡は存在しないというのが長く定説であったが、1946（昭和21）年、行商をしながら独学で考古学を勉強していた相澤忠洋（1926~89）が、群馬県岩宿の切通しの赤土のなかから打製石器を発見した。それがきっかけになって日本列島にも旧石器が存在したことが明らかになったのである。

岩宿も相澤忠洋もともにゴシックで表示されているから、それだけ日本の歴史上重要な事項だということなのだろう。ここにいう更新世とは地質時代の区分の一つで、約258万年前から約1万年前までの期間をいい、その大部分は氷河時代であったという。岩宿博物館はなかなか現代的なデザインであり、周りには池や公園も整備され、展示も充実していただけては、私のような素人にもよく分かるように陳列されており、学芸員の方の説明も簡潔で要をえてい

たので、何とも申し分のない場所だった。

また相澤を語る上で欠かすことのできない愛用の自転車やオートバイも展示されており、彼がこの自転車にまたがって桐生から東京まで何度も出掛けたのかと思うと、感慨深いものがあった。私などは、相沢の『岩宿の発見—幻の旧石器を求めて—』（講談社文庫、1973年）を博物館のショップで初めて知り、調査旅行から戻ってすぐに読んだのだが、もしも博物館に出掛ける前に読んでいたら、あの自転車をさらに印象深くいつまでも眺めていたことだろう。相澤忠洋という一人の人間の話に入る前に、せっかくだからもう少し詳しく岩宿遺跡の概要を紹介しておこう。博物館で入手したパンフレットには、おおよそ次のようなことが書かれていた。

日本文化の起源はどこまで遡るか、それは研究者のみならず多くの人達の興味があるところだ。その意味で、日本史の第一頁を書き替えた「岩宿の発見」が、地元の研究者である相澤忠洋氏によってなされたということは、すばらしいことではないでしょうか。昭和21年の秋、稲荷山、琴平山丘陵の鞍部を横切る村道を歩いていた一人の青年が、丘陵の切り通された赤土の崖で数個の石片を採集しました。彼は考古学を研究しており、当時日本における最古の文化とされていた縄文文化の起源について、大変な興味を持っていました。

この時彼は、これらの石器がどのような縄文土器に伴うものなのか考えていましたが、その後、これらの石器がこれまで知られている縄文時代の石器と異なった特徴をもつことや、発見される地層がどうやら関東ローム層と呼ばれる赤土の中からであるらしいことなどの事実をつかみました。縄文時代の遺物は、関東ローム層の上に堆積した黒色土の中から出てきます。さらにこの関東ローム層と呼ばれる赤土は、約一万年前より以前に火山の噴火によって堆積した火山灰であり、その当時は火山の活動が激しくて人類の住めるような環境ではないといわれていました。したがってローム層の中から人類文化の痕跡を持つ遺物が発見されるわけがないと、この頃の多くの研究者は考えていたのです。

しかし、彼はこのような既成の概念にはとらわれず、自分で確かめた事実を信じ、採集した石器類は明らかに赤土の中から出土したということを確認したのです。昭和24年7月に相澤氏よりこの事実を聞いた芹澤長介氏は、ことの重大さを直感し、すぐに明治大学の杉原荘介氏に連絡しました。こうして同年9月、明治大学考古学研究室による岩宿遺跡の学術調査が行われることになりました。そしてこのことが、同時に日本における本格的な旧石器文化研究の幕開けとなったのです。

このようにして、岩宿遺跡は日本文化の起源が旧石器時代に遡ることを初めて立証した遺跡となるのだが、この岩宿博物館からしばらく歩いたところ、すなわち彼が最初に石片を発見し

た側には、小さくて素朴な岩宿ドームと彼の簡素な胸像、そして岩宿遺跡と掘られた碑がある。私は博物館の説明を一通り聞いた後、小雨の中ドームにまで出向いてみた。誰もいない静かな場所だった。またこの博物館とは別に、桐生市内には相澤忠洋記念館があるとのこと。現在は休館中のようだが、館長は彼の妻である相澤千恵子であり、名誉館長は先の芹澤である。博物館とは別に記念館がある理由などについては後に触れてみたい。

岩宿遺跡雑感

2019年には、岩宿博物館と相澤忠洋記念館の共催で、岩宿遺跡発掘70周年を記念した特別展が開催されている。この特別展開催に合わせて3冊の資料集が作成されたようで、物好きな私はそれをすべて購入した。振り返って思うに、博物館を見学して相澤忠洋という人物に、いたく興味を覚えたからである。じつは、春の実態調査で桐生を訪れた際に、ボランティアのガイドの方が、「ここが岩宿遺跡で有名な相澤さんが住んでおられたところです」と指を指して教えてくれたのだが、その時はさほど心が動かなかった。相澤のことをまったくと言っていいほど知らなかったからである。今なら興味を持ってしげしげと眺めたはずである。

ところで、先の3冊の資料集だが、①が『相澤忠洋—その生涯と研究—』であり、②が『岩宿遺跡と日本の近代考古学』であり、③が『岩宿遺跡と群馬の考古学』である（以下では①、②、③と呼ぶ）。考古学などには興味も関心もない私のような人間が読んでみても、ほとんど何も分かるまいとは思ったが、広げてみるとあれこれと気になるところが見つかった。例えば②。博物館の館長である小菅将夫（こすげ・まさお）は、冒頭の挨拶文で次のように書いている。

科学としての日本考古学が成立するのは、近代、明治時代からといわれています。近代考古学の始まりは、明治維新後間もない1877（明治10）年、モースによる大森貝塚の発掘です。また、大森貝塚の調査は縄文時代研究の幕開けでもありました。その直後に発掘された陸平（おかだいら）貝塚は、日本人だけで調査・報告され、科学的な手法が徐々に根付き始めました。1884（明治17）年に弥生町遺跡で発見された壺は、弥生式土器の名称の起源となりました。

（中略）弥生式土器から弥生時代という時代名が生まれ、その後、この弥生時代から水稻耕作が始まることになりました。日本人の生活や文化の根幹がここから形成されたことになりませんが、その具体的な稲作集落が最初に明らかになったのは登呂遺跡です。そして、登呂遺跡の調査は、第2次世界大戦後の日本人を勇気づけたことも忘れてはなりません。1946（昭和21）年の相澤忠洋による発見と、1949（昭和24）年に発掘調査が行われた岩宿遺跡は、それまでの歴史の常識を覆し、日本列島に世界史でいう「旧石器時代」が存在することを初めて証明しまし

た。そして、岩宿遺跡は皇国史観から解き放たれた戦後の科学的な歴史研究の象徴となりました。

なかなか興味深い挨拶文である。館長は『「旧石器時代」の発見』（新泉社、2014年）という著作もあるような研究者なので、ただの挨拶文に終わってはいない。富岡製糸場にフランス人のブリュナがいたように、日本の考古学にはアメリカ人のモース（エドワード・S・モース）がいたのである。昔教科書で学んだはずなのに、すっかり忘れていた。

彼はアメリカの動物学者で、標本採集のために来日し、請われて東京帝国大学のお雇い教授を2年程務めた。先の挨拶文にもあるように、大森貝塚を発掘して日本の人類学・考古学の基礎をつくったことでよく知られている。また、日本に初めてダーウィンの進化論を体系的に紹介したのも彼だという。他に気になったのは、登呂遺跡の発掘が「日本人を勇気づけた」とか、岩宿遺跡が「皇国史観から解き放たれた戦後の科学的な歴史研究の象徴」だったと述べられていたことである。

われわれが新たな遺跡の発見にやたらに興奮したり、考古学がブームにまでなったりするのは、日本人の起源が古ければ古いほど立派だと嬉しいような性癖があるからであろうか。私のような人間は、「古代のロマン」などに特段の関心はないが、その言葉に引き付けられる人は案外多いのかもしれない。『古事記』や『日本書紀』の神話部分をも歴史的事実として恥じない皇国史観と、どこかで一脈通ずるものがあるようにさえ思われるのである。明治以降の近代化が、皇国史観の起源となる江戸末期の尊王攘夷思想や復古神道や明治期の国粹主義などを底流にともないつつ成し遂げられていったところに、わが国の近代化のねじれとでも言うべきものが胚胎していたのかもしれない。

さらに③を眺めていたら、これも小菅館長の挨拶文だが、そこには「群馬県の近代考古学研究の歴史は、大森貝塚が発掘調査されたわずか数年後の1880（明治13）年、アーネスト・サトウが前橋市前二子（まえふたご）古墳から発見された資料を調査したことに始まります。その後、岩澤正作による精力的な遺跡の調査や、群馬県全域で古墳の悉皆調査が行われました。戦後は、相澤忠洋による岩宿の発見とその後の発掘調査がありましたが、それ以外にもいくつもの考古学的な研究成果が知られています。考古学ブームの第一波が押し寄せていたといえましょう。」とあった。

私などは、日光に出掛けてイギリス人の外交官アーネスト・サトウのことをようやく少しばかり詳しく知ったぐらいだから、外交官だった彼が日本の文化にも関心を抱き、古墳の調査にまで出向いていたとは思ってもよらなかった。サトウは、地元の人が発見した横穴式石室と副葬品を調査して、その成果を纏めたのだという。出掛けてみていつも思うことだが、繋がりとい

うものは、実にいろいろなところにあるものである。

岩宿遺跡と相澤忠洋

しかしながら、もっとも興味深かったのは、①にある博物館の小菅館長と相澤忠洋記念館の相澤館長の二人の挨拶文である。まずは相澤館長の挨拶文である。そこにはこんなふうに書かれている。「此の度、発掘 70 周年を迎えるに当り、(中略)各位より、岩宿出土の石器だけでなく、相澤忠洋の人間性の判る様に顕彰する展示にする特別展を開催したいとの強い要請を受け、私の永い関心に抱き続けて来た「わだかまり」も変化し全面的に協力することに致しました」とある。ここに言う長年の「わだかまり」があったが故に、博物館とは別に記念館が作られたのではあるまいか。それを受けて小菅館長は次のように書く。

不遇な中でも、信念に基づいて考古学に邁進していった様子は、多くの日本人に感動を与えてきました。岩宿遺跡を発見して世に出した功績は、遺跡や資料とともに不朽の価値があるものと思います。また、著書の『「岩宿」の発見』は、相澤の半生を描いた名著として、全国読書感想文の課題図書として有名です。さらに考古学研究に対するひたむきな姿勢は、近年道徳の教科書にも取り上げられています。展示では、相澤の生涯を物語る具体的な資料を多数展示しましたので、相澤の辿った道筋とその研究に対するまっすぐな姿勢、そして人間相澤忠洋を感じ取っていただきたいと思います。

今回初めて『「岩宿」の発見』を読んだが、一家離散の後浅草で丁稚奉公をしながら尋常小学校の夜間を卒業し、戦後父のいる桐生に復員してからは、赤貧洗うが如き生活のなかで納豆売りの行商までして、相澤は考古学の研究に打ち込むのである。狷介な私のはずなのに、涙なしにはとても読み通せなかった。並大抵の苦勞ではないのだが、相澤はその苦勞に押し潰されることはなかったのである。

しかしながら、そんなふうと思うのはこちらが赤の他人だからであって、日々の生活も家族の団欒もほとんど顧みることなく、ただただ「ひたむき」で「まっすぐ」に研究に打ち込む相澤は、若くして亡くなった前妻や子供たちからすれば、何とも疎ましい存在だったようだ。ちょうど、安吾の側にいた南川潤が、彼の我が儘ぶりに辟易したように…。

それに加えて、在野の研究者の発見が、大学の研究者たちにどのように扱われたのかも興味深いところである。先にも触れたように、相澤が関東ローム層から石器を採集したことは、芹沢から杉原へと伝わって、本格的な発掘調査がおこなわれることになる。その成果が、旧石器

時代の発見として大々的に報道されたのだが、杉原が執筆した岩宿遺跡の報告書には、相澤の名前は出てこない。ただ「相澤忠洋君にわれわれの発掘調査についての斡旋の労をとっていただいた」という簡単な謝辞が記されていただけだったという。苦労を重ねてきた相澤にしてみれば、何とも釈然としない思いであったろう。

上記のようなことを、上原善公の『発掘狂騒史―「岩宿」から「神の手」まで―』（新潮文庫、2017年）を読んで知った。岩宿遺跡の裏側には、発掘をめぐるあまりにも人間臭いドラマが展開されていたのであり、知らなくてもいいことまで知ってしまったような気分になった。記念館館長の長年の「わだかまり」とは、そんなところにもあったのかもしれない。先の『「岩宿」の発見』には次のような文章がある。

赤土の崖と私がよんだそこは、たちまち「岩宿の崖」とよばれ、「岩宿遺跡」となり、「岩宿文化」となった。十月からは大々的な発掘調査が実施された。各新聞は日本に一万年以前、または十万年前にも人間がいたことが実証されたと報道した。私は、あるときは奇人にされ、あるときはインチキだ、売名的サギ行為だと非難の声があがるなかにまきこまれながら、そのことが学問的になればなるほど、大きくなっていくことがたまらなくさびしかった。学問とは二次的な立場から出発した私に、執念がもえたとすれば、それは孤独な心と赤土の謎への追究が、ともし火となってもえたとはいえないだろう。しかしまた、岩宿の丘、赤土の崖は、静寂に戻っている。その大自然の静寂をよそに、そこから発見された文化、そしてその調査にたいしては、学界も世間も騒然となっていった。商品にしてみればパテントあらそいということであったらうか。

今回の実態調査で岩宿博物館に立ち寄ったのは、もしかしたら「せっかく近くまで来たのだから」といったような、いささか俗っぽい理由だったのかもしれない。私もそんな思いで見廻つたに過ぎないのだが、そのうちに私の興味や関心はどんどんと広がっていった。思いも掛けぬ展開である。

ところで話は余談となるが、相澤が世に知られるきっかけを作ったのは芹澤であり、そして彼の愛弟子の一人だったのが、「神の手」と呼ばれて遺跡発掘の際にたびたび捏造を繰り返した藤村新一である。芹澤は「神の手」の所業に対して疑いを抱くことはなかったようだ。この事件の顛末については、毎日新聞旧石器遺跡取材班による『発掘捏造』（毎日新聞社、2001年）が詳しい。下手なミステリー小説を読むよりよほど面白い。藤村は、第二の相澤になりたくて、発掘をめぐる狂騒曲に乗って踊ったようだが、もしかしたら、発掘のたびに協奏曲を奏で続けてきたマスメディアによって、踊らされていたのかもしれない。

足尾銅山の光と影

三日目は、先に触れた「日本絹の里」を午前中に訪ね、午後からは足尾銅山を巡り、その後日光の中禅寺湖の湖畔にある英国大使館別荘記念公園に向かった。なかなかタイトなスケジュールの一日であった。足尾でもらった観光ガイドマップには、足尾は「産業遺産と環境のまち」であり、「まち全体が博物館」だとあった。「足尾のまちを歩けば、『銅山のまち』として栄えた頃の面影がいたるところで見られます。まち全体が、日本の近代産業発祥の頃を物語る博物館なのです」というのである。銅山があつての足尾のまちであり、まち全体が銅山に依存して発展してきたということなのだろう。

今回の実態調査には、前回同様高崎経済大学に勤務しておられた大島登志彦さんが同行してくれた。そして、ところどころでガイド役を買って出てくれただけではなく、関連資料まで配付してもらった。そのなかに、彼の執筆による「足尾銅山・足尾町の歴史と産業遺産」というタイトルの論文があった。雑誌『地理』の2008年4月号に掲載されたものである。足尾という地の概要を知るうえで簡潔で要を得た論文だったので、ポイントを絞り加筆・修正して以下に紹介させていただく。

足尾銅山は、江戸時代に開削され、その後明治から戦後の高度経済成長期まで、わが国における産業近代化の一翼を担ってきた。400年ほど続いた銅山であったが、1973年に閉山した。足尾には、産業近代化の足跡を示す多数の産業遺産が点在する。しかしその近代化によって、山々の荒廃が極度に進行し、そのうえ洪水時に鉱毒が渡良瀬川下流にまで流出したので、かつては「公害の原点」とまで称された場所である。しかしながら、近年は世界的に環境問題がクローズアップされるなかで、環境保全に向けた運動が盛んになっている。

栃木県は、2007年に近代鉱工業の発展と負の遺産としての鉱毒被害の両面を併わせ持っていることを踏まえて、「足尾銅山－日本の近代化・産業化と公害対策の起点－」を、世界遺産の候補地として提案している。江戸時代には幕府直轄の銅山として繁栄した足尾銅山だが、明治に入ると古河市兵衛に払い下げられ、古河鉱業の経営する足尾銅山と足尾製錬所が設立されている。

当時国内には多数の銅山があつたが、足尾は全国の銅生産量の40%以上を占め、一時は東洋一の産出量を誇ったのだという。また、銅は重要な輸出品であつたので、とくに日清・日露戦争期に大增産されることになった。その結果、足尾町自体も栄え、1916年の人口は3万8,000人を超え、当時は栃木県では宇都宮や足利と並ぶ大都市に成長した。

一方、製錬所が排出する亜硫酸ガスによって山々の緑は枯れ、渡良瀬川には汚染物質が流出

して足尾鉍毒事件に発展した。製錬所が溪谷の合流部に位置し、溪谷内に煙が滞留しやすい地形だったことも、緑の破壊に拍車をかけたという。戦後の足尾は、鉍山の採掘量が伸び悩むなかで、町の人口も1945年には約2万人、銅山が閉山した73年には約1万人にまで減少した。そうしたなかで、輸入鉍石を増やすことによって銅の生産量を増やしたため、閉山後の80年頃には年間約4万トンにまで達してピークを迎えた。

だが、製錬事業は内陸の足尾よりも鉍石の輸入港近くのほうが有利なため、古河鉍業は生産の主力を国内の臨海地域やフィリピンなどに移して、1988年には足尾での製錬を停止した。折しも、国鉄足尾線は翌年の89年にはわたらせ溪谷鉄道に移管された。足尾町の人口は、先のような事情もあって、その後急速に過疎化が進み、近年は3,000人を切るところまで減少している。そして、2006年には日光市に合併され、かつての銅の町の面影は急速に失われてきている。

以上が、大島さんの論文を下敷きにした足尾銅山および足尾町の盛衰に関する概況である。銅山の閉山にともなって人口が激減した場所は、きつとうら寂しいところに違ひなからうと思ひながら、足尾に向かった。バスはわたらせ溪谷鉄道（観光パンフには「わ鐵」とあったので、以下それにならうことにする。鐵が旧字なのが印象的である）に沿いながら、霧雨のなか山の斜面のカーブした道を登っていく。深山幽谷とはまさにこのことか。

雨に煙っていたために、残念ながら溪谷美を目にするわけにはいかなかったが、もうしばらくすれば紅葉の季節を迎え、美しい秋景色が眼前に広がるのであろう。向かったのは足尾銅山観光通洞坑（つうどうこう）である。わ鐵には足尾駅の一つ手前に通洞という駅があり、目的地はその近くにある。ついでに書いておけば、通洞の次が足尾、そしてその次が終点の間藤（まとう）の駅となる。

バスの走った道路は、昔は銅（あかがね）街道と呼ばれた道らしい。金はこがね、銀はしろがね、鉄はくろがねであり、銅はあかがねと読む。調べてみると、この街道は群馬県の伊勢崎市にある平塚（現在は平塚公園になっているようだ）と足尾とを結んでおり、近世以降足尾銅山から産出された銅を運搬するのに利用されたのだという。

沢入（そうり）、花輪、大間々、大原、平塚には宿が置かれ、それぞれ宿場町として栄えたようだ。銅は平塚から船で利根川を下って江戸に送られていたのだが、明治以後は銅の搬出先が日光に移ったために、街道は衰微していくことになる。わ鐵の拠点の駅となる大間々には、大正や昭和初期の面影を色濃く残した町並みがあるようで、当時の銅蔵も残っているとのことである。

前回書いた旅日記に、家人の母親が桐生の風呂屋の出だと書いたことがあるが、祖母は大間々の農家の出である。家人は幼い頃祖母に連れられて、大間々の祖母の実家に出掛けたことがあ

るらしい。実家が近付くにつれて祖母の足が速くなったと語っていた。祖母も生まれ故郷に久方ぶりに戻ってきて、嬉しかったのであろう。その時の光景が目浮かぶようである。親戚の叔父の一人は足尾銅山で働いていたが、胸を患って亡くなったとも語っていた。長年鉱山労働に従事していて塵肺に冒されたのである。家人は、叔父が住んでいた足尾の社宅にも行ったことがあるらしい。

ところで先の通洞坑であるが、通洞とは、坑口から水平に掘進された鉱山の主要な坑道のことであり、そこを通過しないとどこの坑道へも行けない中心的な坑道を言うとのこと。駅名や地名に通洞という名が残る場所は足尾以外にはないらしく、昔はこの近辺に社宅が建ち並び町の中心部であったようだ。銅山の閉山後は足尾町によって坑内観光の施設として整備され、足尾を訪れた人は誰もが立ち寄る足尾観光の拠点となっている。

地下の坑内を見学できるという物珍しさもあって、それなりに観光客はいるようである。我々が到着した時には、遠足にきた小学生が大勢いて賑やかであったので、私の寂しさも少しばかり紛れた。そんな場所でただぼんやりと佇んでいたら、昔若い頃に二村一夫さんの『足尾暴動の史的分析』（東大出版会、1988年）という立派な著作を手にして、そのさわりの部分だけを読んだことを急に思い出した。軍隊まで出動したこの暴動が起きたのは、1907（明治40）年のことである。

古河市兵衛と田中正造

通洞坑の入口まではトロッコに乗らなければならないが、大勢の人数が乗れるわけではないので、しばらく待たされた。トロッコに乗車して地下に入るとすぐに坑口に着く。この通洞坑を歩いて行くと、江戸時代から明治、大正、昭和と、それぞれの時代ごとに採掘の様子が変わっていくことがよく分かる、そんな展示となっていた。足尾銅山の歴史を学ぶコーナーもあった。通洞だから他の坑道よりも当然広いはずだが、濡れた狭い坑道を歩きながら、地中で働いていた人々の模型を見たり会話を聞いていると、鉱山での労働の厳しさがひしひしと伝わってくる。

坑道をすべて繋ぐと東京から博多にまで至ると言われるほどの日本最大の銅山であり、そしてまた鉱毒事件で知られた銅山でもあるのだが、通洞坑の観光だけでは足尾銅山の光と影は見えてはこない。観光施設としてはやむをえないのかもしれないが、その対照を見つめる視線の弱さが少しばかり気にはなった。坑道の出口には、「銅もありがとう、また銅ぞ」などと書かれた看板が架けられていた。知り合いのFさんは駄洒落が得意なことでよく知られているが、私が勝手に推察するに、足尾にも彼のような人物が「どう」もいるらしい。まあ「どう」でもいい話ではあるのだが…。

われわれは通洞坑に入って坑内の様子を眺めただけであったが、「まち全体が博物館」だと言われている足尾には、産業遺産が至る所に溢れている。それらの多くは、わ鐵の足尾駅の近辺や終点である間藤（まとう）駅からさらに奥に入ったところにあるようだ。今回は、時間の関係でそうしたところにまで足を延ばすことはできなかったが、きっと興味深い場所であるに違いない。

銅は、採鉱、選鉱、製錬の生産工程を経て産出されるので、それらの工程を維持するための設備がまずもって大事となる。併せて、生産基盤となる輸送、電力エネルギー、工業用水などを十分に確保できるような諸施設も、整備されなければならない。さらには、鉱山全体の管理・運営を担う経営分野の施設に加えて、社宅を始めとした働く人々の生活施設も不可欠となる。足尾銅山とは、それらのものをすべて備えた空間であり、典型的な一大鉱山町や鉱山集落であったのだろう。その特徴は、鉱山にすべてが依存していたために、閉山によって町や集落が一気に衰退していくところにあるようだ。

間藤駅の奥は本山（もとやま）坑エリアと呼ばれており、そこには多くの産業遺産がある。だがそれらの多くは非公開だとのこと。旧くなっているのも、近づくに危険だということなのであろうか。仕方がないので写真で眺めるしかないのだが、廃墟と化した施設群はいささか不気味な感じがしないでもない。

世の中には廃墟や遺構の探索に興味を持つような人々もいて（私もそんな人間の端くれにいるような気がする）、彼らが撮った写真を見ていると、栄華の夢が醸し出している侘しさや虚しさだけがひしひしと伝わってくる。こうした感覚が生まれてくるのは、もしかしたら、こちらが余所者として足尾を訪れ、部外者として表層を眺めて、旅人として勝手に感傷に浸っているだけだからなのかもしれない。

通洞坑の観光の際に、トロツコの待ち時間に小さな駅舎に貼られていたポスターを見てもなしに眺めた。全面に広がった夕焼けを背景にして、鉄橋を渡るわ鐵の電車が撮られており、あまりに素晴らしい写真のでき映えにうっとり見とれた。しかしながら、それよりも大事だったのは、「近代化の光と影」と「足尾銅山を世界遺産に」の大きな文字が入ったポスターの方であったろう。日光市観光協会が作成したものである。

足尾銅山の光と影、ひいては日本の近代化の光と影を象徴する人物と言えば、古河市兵衛（1832～1903）と田中正造（1841～1913）をおいて他にない。正造は市兵衛よりも10年程遅れて出生し、そして没している。この二人の人物に関しては山なす文献や資料があり、たくさんの研究がある。だから私のような門外漢が、ちょっと調べて何かを書いたとしても群盲象を評すようなことにしかならないはずである。そんなことをしても意味がない。仕方がないから百科事典の人物紹介に世話になることにした。

そこでは二人は次のように紹介されている。まずは古河市兵衛であるが、「幼時から立身出世の願望が強く」とか、「銅山王」とか、「晩年には足尾銅山鉍毒事件の発生などにより、彼の独裁は揺らぎ」などと書かれている。百科事典の人物紹介にしては、何ともユニークな記述であり興味深い。

古河市兵衛。明治期の実業家、古河財閥の創始者。天保3年に京都岡崎の商人の次男に生まれる。幼時から立身出世の願望が強く、伯父を頼って出郷し盛岡の鴻池屋（こうのいけや）の手代となる。1858（安政5）年に小野組（おのぐみ）糸店の手代であった古河太郎左衛門の養子となり、古河市兵衛を名のる。その後小野組に勤め、幕末・維新时期に生糸貿易に敏腕を振るうとともに、阿仁（あに）、院内など諸鉍山の経営にあたった。小野組破産にともない零落したが、渋沢栄一らの資金援助を得て鉍山業に乗り出し、1877（明治10）年にはそれまで活動の中心をなしてきた生糸取引業をやめ、鉍山経営に専念するようになった。

とくに足尾銅山の経営には力を注ぎ、大学出の新進技術者を多数採用して、大通洞の開削をはじめ水力発電所の建設やベッセマー精錬法の導入など鉍山技術の革新に努めた。この結果、買収時には廃山同然であった足尾は、1890年代には早くも全国第一の銅山にまで発展し、市兵衛も銅山王としての地位を築いた。さらに阿仁、院内などの金・銀・銅山および炭坑の経営にあたり、電気精銅所など関連事業へも進出した。晩年には足尾銅山鉍毒事件の発生などにより彼の独裁は揺らぎ、古河鉍業（現古河機械金属）事務所が設置されて経営方針も変化した。1903（明治36）年死去。

では田中正造の方はどうだろうか。彼は同じ百科事典で、以下のように紹介されている。ここで興味深いのは、最後に登場する「その生涯は江戸時代の義民と民権家との系譜関係を想像させる」との一文であろう。自由民権運動は、士族民権と呼ばれた士族中心の運動から、農民の地租軽減の要求とも結びついて、豪農や地主、商工業者が参加する豪農民権と呼ばれた運動に推移していくのであるが、そのメンタリティーは江戸時代の義民と相通ずるものがあると言いたいのであろうか。

田中正造。明治期の民権家、政党政治家、社会運動家。下野国安蘇郡小中村（栃木県佐野市小中町）の名主の家に出生。父は富蔵、母サキ。儒家赤尾小四郎の塾に学ぶ。維新後江刺県（岩手県）付属補などを経て、1878（明治11）年ごろから自由民権運動に参加。1880（明治13）年栃木県会議員に当選。県民負担軽減、小学校教育充実などに取り組み、三島通庸県令とは特に激しく対立した。県会議長を経て第1回総選挙から6回連続衆院議員に当選、立憲改進黨、進

歩党の重鎮として議場で活躍。

1891（明治24）年頃から足尾鉍毒問題に関心を持ち、たびたび政府に質問書を提出。1896（明治29）年の渡良瀬川の大洪水を契機に鉍毒被害が深刻化すると、さらに関心を深めていったが、それとともに政界で孤立化した。1901（明治34）年12月に、第16議会開院式帰途の明治天皇に直訴を試みるも果たせず。以後も運動を続けたが貧窮の中で病死した。その生涯は江戸時代の義民と民権家との系譜関係を想像させる。

田中正造と足尾鉍毒事件

私の関心は、古河市兵衛よりも田中正造の方にあるのだが、彼についても教科書知識程度のことしか知らない。興味深い人物だとは思っていたが、詳しく知る機会がなかった。こんな機会を生かさない手はないと思ったので、岩宿で相澤忠洋を知るために『岩宿の発見』を読んだように、今回は名著の誉れ高い二冊を読んでみることにした。ひとつは「田中正造と足尾鉍毒事件」と副題が付いた城山三郎の『辛酸（しんさん）』（角川文庫、1979年）であり、もう一つは荒畑寒村の『谷中村滅亡史』（岩波文庫、1999年）である。

先にも触れたところだが、田中正造の「生涯は江戸時代の義民と民権家との系譜関係を想像させる」との紹介が気になった。義民とは、民衆のために我が身を犠牲にした者のことであり、とりわけ領主の非道に抵抗して一揆を指導し刑死した者を、義民（または義人）と呼ぶ。とくに江戸時代について言われるとのことである。明治期の自由民権運動のなかで義民の顕彰が盛んに行われたこともあって、先のような義民観が定着したらしい。義民と民権家はこのようにして繋がっており、民権家でもありその後地位も名誉も財産も、そしてまた夫婦の関係さえも擲って谷中（やなか）村の農民のために死力を尽くした田中正造などは、さしずめ明治期の義民のような存在であったのだろう。

『岩宿の発見』は自分史であったが、城山三郎の『辛酸』は伝記文学であり、彼の「作家活動の礎となった記念碑的作品」（魚住昭の解説による）だということである。城山自身は、「わたしはこの材料と取り組んだことで、作家としてのこの上ない生きがいを感じ、また、絶え間なく鞭打たれつづける思いがした」と書いているが、確かにそう書くだけのことはある。そんなわけで、こちらも居ずまいを正して読まざるをえなかった。不撓不屈の精神で立ち上がる人々に、私もまた鞭を打たれたからである。この作品には、正造が「死ねば明治の佐倉惣五郎になる」と周りから言われたという話も登場する。

ところで、この作品は偉人としての正造を讃仰しているだけの作品ではない。そこには「辛酸入佳境」（辛酸佳境に入る）という正造が好んで揮毫した漢詩の一節が何度も登場するのだが、

その意味は複雑である。城山は、正造の秘書兼雑用係でもあった主人公の一青年の思いを、次のように書いている。

「辛酸を神の恩寵と見、それに耐えることによるこびを感じたのか。それとも、佳境は辛酸を重ねた彼岸にこそあるというのか。あるいは、自他ともに破滅に巻きこむことに、破壊を好む人間の底深い欲望の満足があるというのだろうか」。死に際に残されたのは頭陀袋（ずだぶくろ）のみであり、中には鼻紙と石ころと聖書だけが入っていたと言う。

もう一つの寒村の作品だが、こちらは正造の依頼によって書かれたドキュメンタリーであり、あれほどまでに豊かだった谷中村が、ついには滅亡にまで至る惨状を後世に伝える作品となっている。以下に冒頭の一節のみを紹介しておくことにしよう。

谷中村の今日ある、けだし遠く因を鉱毒問題に発す。見よ、明治十年政府の足尾銅山を古河市兵衛に貸与するや、古河のこれを経営する、実に巨万の資本を投じ、精巧の機械を設けて採鉱に従事せり。爰（ここ）においてか銅の産出俄（にわか）に増加して、ほとんど鉱業界の面目を一新したりき。しかれども世人が、この表面の鴻益（こうえき）に歓呼喝榮しつゝありし時、何ぞ知らん、銅鉱より出づる悪水毒屑（どくせつ）は、山林濫伐に伴って起る洪水のために、澗谷（かんこく）を埋め、溪流に注ぎ、渡良瀬川の魚族を斃（たお）し、兩岸の堰桶（せきひ）を通じて田圃に浸潤し、草木を枯らし、田圃を荒廢せしめ、人は病むも医薬を求むるに術なく、児は胎むも空しく流産し、たまたま生るゝあるも含むところの母乳はこれ毒水。あゝ昔は豊田千里と謡はれし関東の沃野、鶏犬の声絶えて、黄茅白葦徒らに浅く、終に一個蕭条索落たる荒野の原と化し終らんとは。

ところで、足尾では、現在銅山とその関連施設を世界遺産に登録しようとする動きが既に始まっている。栃木県がここを候補地として決めたのは2007年だということだから、それなりに準備は進んでいるのかもしれない。坑内観光の後土産物屋に立ち寄ったところ、坂本寛明という方が書かれた『みんなに役立つ足尾銅山の歴史』（2021年）と題した冊子が置かれていた。解説書の類いはこれしか置いてなかったので購入しようかどうか迷っていたら、研究所として買い上げて資料として参加者に配布するとのこと。読んでみたところ、あれこれと気になるところの多い著作であった。

足尾銅山が公害のイメージで捉えられていることに反発するあまり、「公害を止めたのも銅山」だと主張しており、ついでにいささか唐突に日本人の道德心の欠如を嘆いてもいる。古河市兵衛の名は登場するが、足尾鉱毒事件の話も田中正造の話もまったく登場していない。ポスターでは「近代化の光と影」と標榜しているにもかかわらず、影は過去のものとして消え去って

るかのようだ。こうした冊子を並べている（あるいは、こうした冊子しか並べられていない）ようでは、世界遺産の登録への道のりは遠かろう。ネットで探ただけでも、足尾を紹介する優れた冊子はすぐに見つかる。何とも残念な思いがした。

そして、足尾にはもう一つの影も存在している。もらった観光ガイドマップを広げると気が付くことだが、わ鐵の原向駅の先を北上した小滝坑エリアには朝鮮人供養塔や中国人捕虜収容所跡や中国人殉難烈士慰霊碑がある。朝鮮人供養塔は正しくは足尾朝鮮人強制連行犠牲者追悼碑という。中国人殉難烈士慰霊碑は、閉山の年の1973年に地元の日中友好協会の手によって建立され、碑には「太平洋戦争末期、中国から強制連行されて来た257名が、足尾銅山の労働に従事し109名が殉難した」と刻まれているとのこと。

こうした問題に関しては、古庄正（こしょう・ただし）の『足尾銅山・朝鮮人強制連行と戦後処理』（創史社、2013年）という興味深い著作もある。いずれにしても、世界遺産への登録を目指すのであれば、凄惨を極めた足尾鉍毒事件の顛末は勿論のこと、中国人、朝鮮人の強制労働に関する歴史的事実も無視するわけにはいかないであろう。

「近代化の光と影」などと言ったり書いたりすること自体は容易であろうが、両者の錯綜した内実を見極めることは、きわめて難しい作業となる。「光」が眩しければ眩しいほど「影」は深さを増すからである。足尾銅山の歴史がわれわれに教えていることは、そのことのようにも思われた。

英国大使館別荘記念公園にて

足尾を離れたわれわれは、時折降る霧雨の中を日光に向かった。この日の夕刻に訪ねたのは、中禅寺湖の湖畔にある英国大使館別荘記念公園である。大分昔のことになるが、日光に遊びに来た際にこの記念公園にも立ち寄ったことがある。過ぎ去りし日の懐かしい思い出に浸りながら、窓から中禅寺湖の暮れゆく夕景を眺めた。そしてまた、翌日の午前中には日光金谷ホテル歴史館を見学した。ホテルの前身である金谷カテッジインが、現在は歴史館として保存されているからである。

事前に研究所の事務局から送られてきた今回の調査旅行の趣意書には、「保養地の近代化遺産と西洋からの『眼差し』について学ぶ」とあった。「眼差し」とはなかなか興味深い表現である。調べてみると、見ることを人間関係におけるきわめて重要な要素と見なしたうえで、他者を見ることによって主体と客体の関係が成立すると考える場合に、主体が客体に向ける目が眼差しと呼ばれるとのこと。たんに眼で見ることを超えて、対象の認識にまで至るような視線とでも言えればいいのか。

ところで、よく知られていることとは思うが、日光の社寺は既に 1999 年に世界文化遺産に登録されている。登録されたのは、日光 1200 年の伝統を継ぐ二荒山神社、家光の霊廟が建つ輪王寺（りんのうじ）、そして日光東照宮と周辺の景観である。われわれは日光と言えばこちらの日光（とりわけ東照宮だろうが）しか思い浮かべないような気もするが、英国大使館別荘記念公園や金谷ホテル歴史館には、もうひとつの日光がある。近代化遺産として注目すべきはこちらの方であろう。英国大使館別荘記念公園で手にしたパンフレットには、次のような一文が記されていた。

ここは、中禅寺湖の豊かな自然や国際避暑地の歴史とのふれあいが楽しめる公園であり、明治中頃から昭和初期にかけて、中禅寺湖畔には各国の大使館をはじめ多くの外国人別荘が建てられ、国際避暑地としてにぎわいました。園内の建物は、英国の外交官で明治維新に大きな影響を与えたアーネスト・サトウの個人別荘として 1896（明治 29）年に建てられ、その後、英国大使館別荘として長年使われてきた姿に復元したものです。内部では、国際避暑地としての歴史や当時の英国文化について紹介しています。また、2 階の広縁からは、サトウが愛した中禅寺湖畔の「絵に描いたような風景」を満喫できます。

いずれにしても、この英国大使館別荘記念公園はアーネスト・サトウ抜きには語れない。サトウなどと書くと、佐藤を思い出して日本と何らかの関わりがある人物であるかのように思いがちだが、まったく関係がない（夫人は日本人だとのことだが）。だが、日本語の読み書きや会話は勿論、古文書の読解にも習熟していたというから、並の日本人以上である。パンフレットには彼と別荘の関係に関して次のような紹介もあった。

奥日光をこよなく愛したアーネスト・サトウ。1872（明治 5）年にこの地をはじめて訪れ、3 年後には英文のガイドブック「日光案内」を刊行し、広く日光の姿を紹介しました。1896（明治 29）年には、自分の山荘を中禅寺湖畔の南岸に建て、好きな登山や植物採取などを楽しんだようです。この山荘にはイザベラ・バードも滞在し、友人あての手紙に「山荘から眺める風景の素晴らしさ」を綴っています。のちに山荘は英国大使館別荘となり、平成 20（2008）年まで利用されました。

内田宗治著の『外国人が見た日本』（中公新書、2018 年）によると、外国人、とりわけ英国人たちが奥日光を気に入ったのは、そこが英国の北部、スコットランドに似た風土だったからだという。夏も涼しい山野は自然豊かで、明治初期まで魚が棲まなかった中禅寺湖近くの溪流

には、放流されたマスが生息するようになっていた。イギリス紳士にとって、毛鉤（けばり）を使ってマスなどを釣るフライ・フィッシングは、カントリージェントルマンのたしなみであるとされていたとのこと。またこの著作には、次のような記述もある。

欧米人はアジア各地を植民地化すると、そこに避暑地を作ってきた。冷房がなかった当時、彼らには熱帯や亜熱帯に位置する植民地の夏の蒸し暑さが耐えがたく、酷暑の時期、政治・経済活動の拠点を標高が高く夏も涼しい避暑地へと移した。そうしたこともあって、「大正時代から昭和前期にかけて、日本にも夏の首都といえるような欧米人の避暑地が生み出された。その代表が日光の中禅寺湖畔である。湖畔にはイギリス、フランス、イタリア、ベルギーなど各国大使館の別荘が建ち、「夏場は外務省が日光に移る」といわれた。

サトウにも生まれ故郷に対する郷愁の念もあつたに違いなからうが、彼の奥日光に対する偏愛ぶりを知ると、コロニアリズム（植民地主義）の匂いを漂わせた避暑地のイメージがいささか薄らいでくる。快適さを求めただけの外交官たちには、日本に対する眼差しと呼べるようなものはなかつただろうが、日本中を足繁く歩き回ったサトウには、日本に対する深い眼差しを感じるからである。

日光と明治の面影

翌日は調査旅行の最終日であった。この日われわれは午前中に金谷ホテル歴史館を訪ねた。ここも日光の歴史や明治の面影を感じさせる場所だった。手にしたパンフレットには、以下のようなことが記されていた。

1873年（明治6）、東照宮の雅楽師金谷善一郎が、アメリカ人宣教医ヘボン博士の勧めでこの屋敷に開業したのが、外国人専用の宿「金谷カテッジイン」です。「サムライ・ハウス」と呼ばれた宿は、観光や避暑で日光を訪れる多くの外国人に利用されました。イギリス人旅行家イザベラ・バードもそのひとりです。1893年（明治26）、善一郎は本格的なホテル金谷ホテルを創設。宿としての役目を終えた金谷侍屋敷は長年大切に保存され、2014年（平成26）国の登録有形文化財となり、翌2015年（平成27）3月より「金谷ホテル歴史館」として一般公開しています。

金谷ホテルの名は知ってはいたがこれまでに泊まったことはない。伝統的な格式を保った立

派なクラシックホテルだということだから、私のような狷介でがさつな人間が出掛けるようなところではないと勝手に思っているからである。「伝統」や「格式」といったものにいつまで経っても馴染むことができない。こちらが田舎者なのでいささか気後れしている所為もあるのかもしれない。

金谷ホテル歴史館は、イザベラ・バードが宿泊した当時の姿を今でも保っているとのこと。ガイドの方は、ここが彼女の泊まった部屋だと紹介したうえで、当時の様子を詳しく説明してくれた。もらったパンフレットにもイザベラ・バードの文章が引用されていたが、ここでは、時岡敬子訳の『イザベラ・バードの日本紀行』（講談社学術文庫、2008年）から紹介してみたい。何とも美しい訳文だからである。

この家のことはどう書けばいいのかわかりません。まさに日本の牧歌的生活がここにはあります。家の内外ともに目を喜ばせないものはなにひとつなく、あの宿屋のどんちゃん騒ぎを経験したあとでは、勢いよく流れる溪流の水音と鳥のさえずりが快いここの静けさにはまことに心が洗われます。

この家は簡素ながらも不規則な形をした二階建ての離れで、石垣のある敷地に立っており、玄関前には石段がついています。庭は植栽がよく考えて配置しており、いまは牡丹、あやめ、つつじが咲いていてとてもきれいです。山は麓部分が赤いつつじに覆われてすぐうしろに迫り、そこから流れ落ちる山水がこの家の水源となっていますが、冷たくて澄んでいます。

またもう一本の溪流が小さな滝となって落ちたあと、この家の下を通過して岩の小島のある池をめぐり、下の川に合流しています。入町の灰色の家並みが道路の反対側に大谷川とともに閉じ込められてあり、その向こうには小高い山々が途切れながらそびえ、山々を覆う豊かな森には峡谷や滝の亀裂が入っています。とてもやさしくて上品な雰囲気金の妹が玄関でわたしを迎え、ブーツを脱がせてくれました。

二カ所ある縁側はよく磨き込まれており、それは玄関やわたしの部屋に通じる階段も同様で、畳はとても上質で白く、ブーツを脱いでストッキングだけとなった足でさえ、歩くのがためらわれるほどでした。磨き込まれた階段を上ると美しい景色の望めるびかびかに磨き込まれた広縁があり、そこから広い部屋に入ります。

イザベラ・バードの感激ぶりが何とも直裁に伝わってくる文章ではないか。歴史館に併設されている金谷カテッジインに立ち寄った際に、「日光金谷ホテルの百二十年」と副題が付けられた『森と湖の館』（潮出版社、1998年）という本を見つけた。金谷ホテルの歴史を辿った本なのだが、著者が作家の常盤新平（ときわ・しんぺい）だったので、もしかしたらブログを書く際

に役に立つかもしれないと思って購入しておいた。作家の書いたものであれば少しは面白く読めるのではないか、そんな思い込みがあるからである。今回この旅日記を書くために斜め読みしていたら、次のような文章に出くわした。

先年亡くなった池波正太郎が、このホテルの何もかも以前のままだに保存されていることに瞠目したとき、金谷は『鬼平犯科帳』や『剣客商売』でつとに有名なこの作家に言った。「温存させてゆくために、まったく神経を磨り減らしてしまいます」。金谷ホテルに滞在した池波正太郎は古きよきものが温存されていることに賛辞を惜しまなかった。それは建物や器物のみではなく、ホテルで働く人たちやダイニング・ルームの味覚も含めて、世界的に知られた金谷ホテルの風格を持続させていたからだ。

昼食はこの金谷ホテルのレストランでとることになっていた。食事の開始までに間があったので、折角の機会だからと思ってホテルの中をあれこれと眺めて廻った。今では創業以来 150 年近くは経っているので、内装は確かに古い。古くて当然である。今古いと書いたが、これではただ時間が経過したというだけの表現に過ぎないであろう。懐かしさを表すのであれば旧いと書きたくなるし、由緒のある古さであれば故いと書いた方がいいのかもしれない。例の「温故知新」の故である。金谷ホテルの場合は、その由緒ある長い歴史を維持していることもあって、故いがもっとも相応しいのかもしれない。

今回の調査旅行で、私は古きものの中に何を見たのであろうか。そこには「眼差し」と呼べるようなものがあつたであろうか。そんなことをぼんやりと考えながら、東武日光駅から帰途についた。終点間際に電車はスカイツリーの側を通ったが、天を衝くばかりのその超近代の巨像は、私にはただただ高いだけの内容空疎な虚像のようにも思われた。旧さや故さを拒絶しているかのように感じられたからなのであろう。